1　北方領土のあらまし

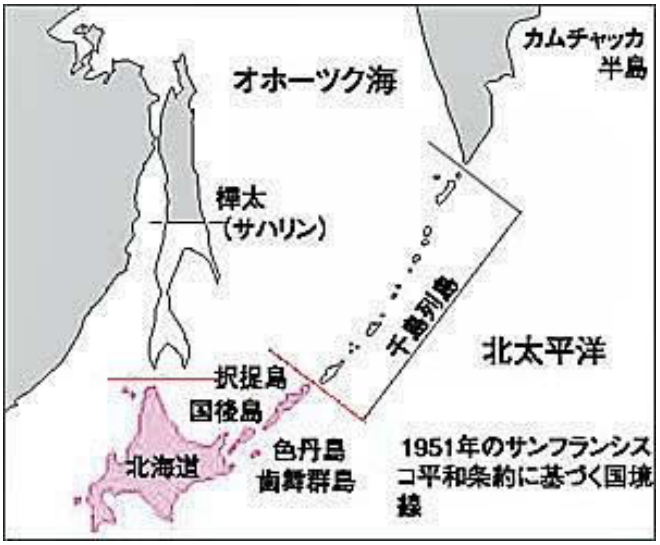
（１）北方領土とは

ア　北方領土の位置

北方領土とは、北海道本島の北東の海上に連なっている歯舞群島、色丹島、国後島、択捉島のことをいいます。

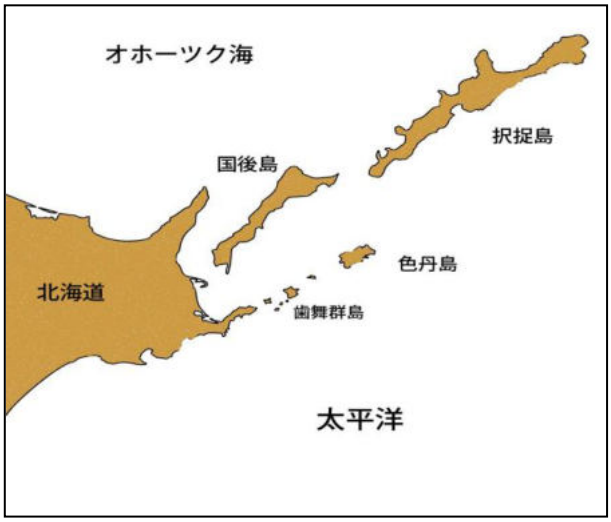
歯舞群島は、根室半島の納沙布岬から、わずか７キロメートル離れた水晶島をはじめとする秋勇留島、勇留島、志発島、多楽島などの島々からなっています。

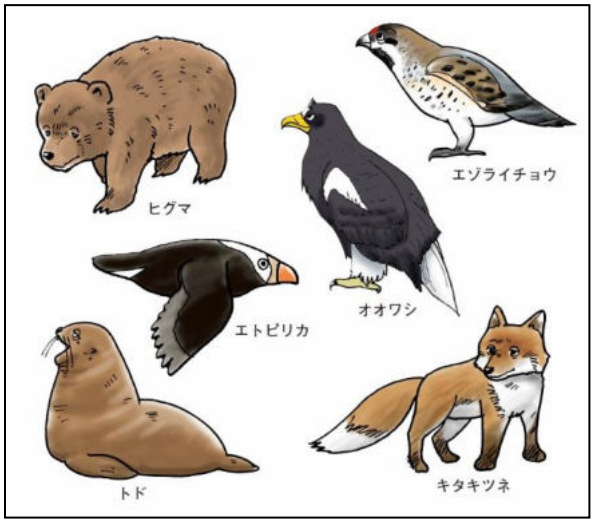
北方領土位置図



色丹島は、さらにその北東にある島です。国後島は、野付岬から16キロメートルはなれたところにあり、根室半島、知床半島にはさまれた位置にあります。

択捉島は、国後島の北東にあり、北方領土の中では、一番大きな島です。





北方領土に住んでいる動物たち

イ　北方領土の自然

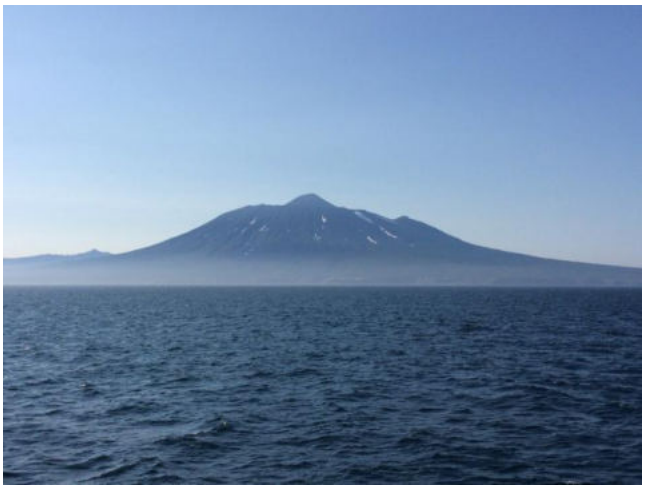
（ア）地　形

国後島、択捉島は、その北東に位置する千島列島（クリル諸島）と連なっていて、これらの島々の中央には、千島火山帯が走っています。そのため、山は海岸からすぐ切り立っているものが多く、国後島の爺爺岳、択捉島の西単冠山や散布山など、1,000 メートルをこえる高い山が 10 以上もあります。

2 つの島は、山脈をはさんで太平洋側とオホーツク海側に分かれているため、川は短くて流れの急なものが多く、いたるところに滝があります。

平野は全体に少ないのですが、2 つの島には、海岸線にそってなだらかな土地が広がっているところもあって、湖や沼も数多くあります。

歯舞群島と色丹島は、大むかし、根室半島と地つづきでしたが、土地の陥没などによってはなれ島になったといわれています。島の多くは、ゆるやかな起伏のある丘陵地（注）で、所々に沼やがけが見られます。



国後島の爺爺岳

（注）丘陵地とは、なだらかな起伏や小山（丘）の続く地形のこと。

北方領土全体の面積は、福岡県や千葉県の面積と同じぐらいで、一番大きな択捉島は鳥取県の面積と同じくらいです。

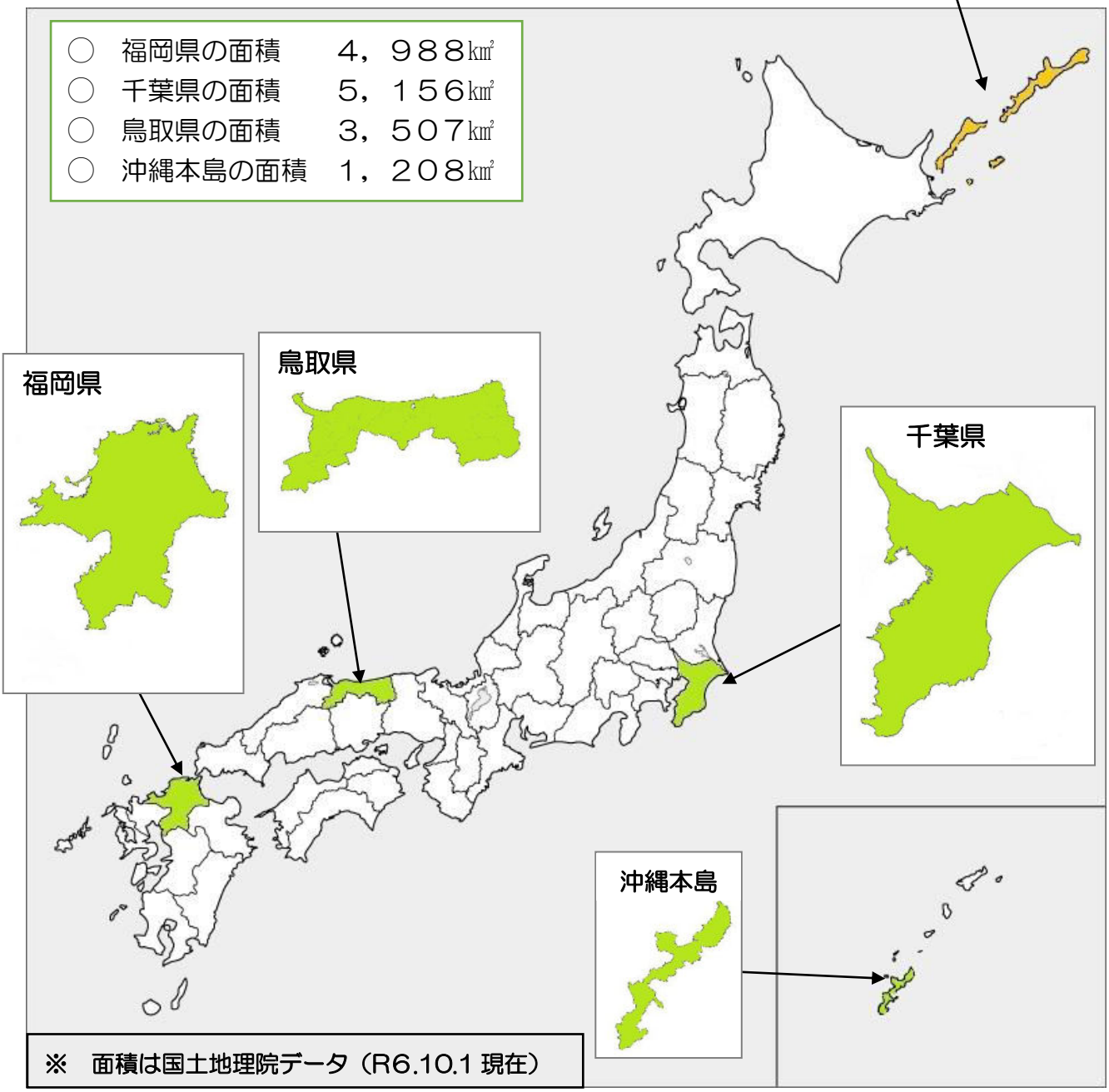
日本の離島を面積の順に並べると第１位が択捉島、第２位が国後島、以下沖縄本島、佐渡島、奄美大島と続きます。

北方領土の面積（小数点以下は四捨五入）

○　北方領土の面積　５，００３㎢※
- 択捉島　３，１６７㎢
- 国後島　１，４８９㎢
- 色丹島　２４９㎢
- 歯舞群島　９５㎢※

※印は周辺の小さな島の面積を含んでいます。

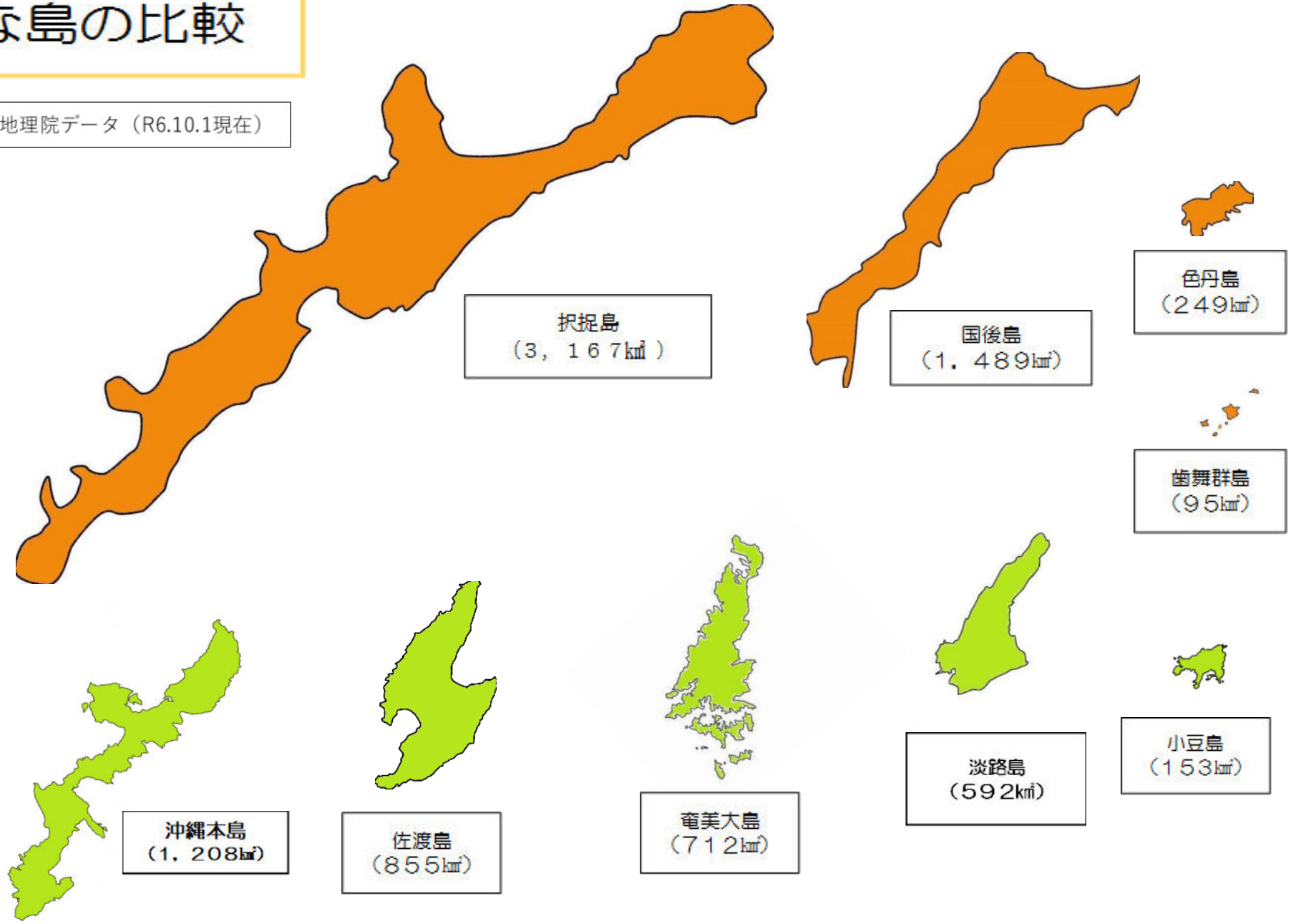
○　福岡県の面積　４，９８８㎢
○　千葉県の面積　５，１５６㎢
○　鳥取県の面積　３，５０７㎢
○　沖縄本島の面積　１，２０８㎢



※　面積は国土地理院データ（R6.10.1 現在）

主な島の比較

※面積は国土地理院データ（R6.10.1現在）

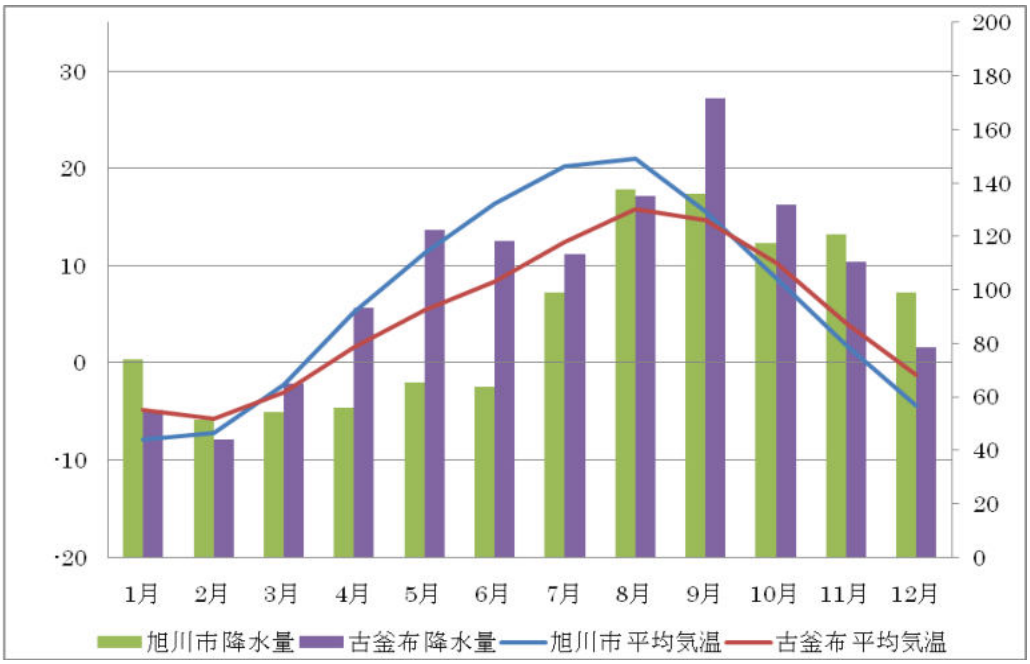


（イ）　気　候

北方領土というと、とても寒さのきびしい土地を想像しますが、実際には、海洋のえいきょうを強く受けており、冬の平均気温は、根室とほとんど同じで、れい下 5 度か 6 度です。冬に雪がつもる量も、平均 50 センチメートルくらいで、あまり多くはありません。

しかし、月の平均気温が 10 度以上になるのは、6 月から 10 月までの 5 か月間だけで、真夏の 8 月でさえ平均 16 度ぐらいです。

■旭川市と北方領土（国後島・古釜布）の気温・降水量



これは、3 月のころから発生する海霧（ガス）のため、日照時間が少なくなるのと、オホーツク海から冷たい風が吹いてくるからです。

年間を通して風の強い日が多く、特に冬の間は、雪まじりの北西の季節風が何日も続くことがあります。

降水量は、冬は少なく、8 月から 10 月に最も多くなります。

国後島の冬（泊村古釜布尋常高等小学校：1937 年(昭和 12 年)11 月撮影）

（２）戦前の北方領土の様子

ア　人　口

北方領土には、どのくらいの人が住んでいたのでしょうか。

第二次世界大戦が終わるまで北方領土に住んでいた人たちについて、４つの島々には、1 万 7,291 人の人々が住んでいました。この中には、皆さんと同じ小学生もたくさんいて、小学校が 39 校もありました。

この他、漁業の最盛期（さいせいき）には、根室や函館（はこだて）、本州などから 10,000 人以上もの人が出かせぎにやってきて大変にぎやかだったということです。

人　　口

	（人）
歯舞群島	
水晶島	986
秋勇留島	88
勇留島	501
志発島	2,249
多楽島	1,457
（小計）	5,281
色丹島	1,038
国後島	7,364
択捉島	3,608
合計	17,291

（1945 年（昭和 20 年）8 月 15 日現在（げんざい））

イ　産業

昔から、たくさんの人々が北方領土の開拓に努力してきたのは、なぜでしょうか。

北方領土は、魚やコンブなどの海産物をはじめ、木材、鉱石など、豊かな資源に恵まれており、資源の少ない日本にとって、これらの開発は大変重要なことだったのです。

色丹島斜古丹湾のクジラ解体作業
（1935 年(昭和 10 年)頃）

択捉島のサケ・マス漁の様子
（昭和初期頃）

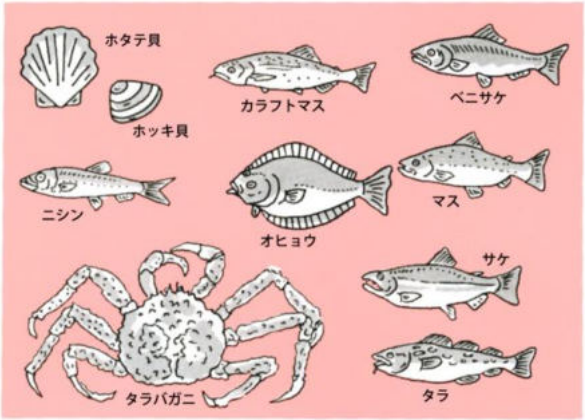
では、主にどのような産業が行われていたのでしょうか。

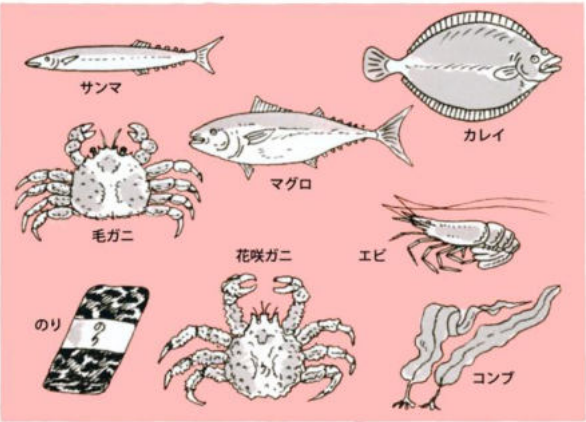
北方領土のまわりの海は、寒流と暖流が接しているため、世界の三大漁場に数えられるほど魚や貝などがたくさんとれるところで、江戸時代から、漁業が行われており、水産業が主要な産業でした。

主な海産物は、サケ、マス、ニシン、サンマ、オヒョウ、カレイ、マグロ、毛ガニ、タラバガニ、花咲ガニ、エビ、ホタテ貝、ホッキ貝、コンブ、のり、クジラなどがとれました。

1939 年(昭和 14 年)から 1941 年(昭和 16 年)までの漁獲量調べでは、年平均で 21 万トンありました。

これらの水産物は、島の工場で干したり、かんづめにするなど、加工されて国内はもちろん、外国にもたくさん輸出されていました。





サケを満載(まんさい)した船が次々とデッキに着いて、クレーンで水洗場に引き上げられた魚の山は、ベルトコンベアで切れ目なく工場内に運ばれていきます。

工場内では、ゴム前かけをしている人が数十人、向かい合って手ぎわよく、頭、尾(お)、ひれ、内ぞう、と切り分けていきます。

ベルトコンベアで運ばれるサケ

ゴム前かけ姿

運ばれてくる魚を待(ま)って作業するのではなく、魚の山に追いかけられて脇見(わきみ)をする暇(ひま)もありません。仕事は、沖(おき)から着(つ)いたとたんにはじまり、夜中(よなか)まで休む間もなく続く重労働(じゅうろうどう)で、寝(ね)る時間も十分でないと聞きました。

―北方領土のむかし―より

国後島の原生林

また、林業も水産業についで重要な産業でした。

特に国後島と択捉島は、島のほとんどが森林でおおわれており、良質の木材が生産されていました。

樹木は、とどまつ、えぞまつが主で大部分は原木のまま根室や函館に送られましたが、一部は島内の工場で製材され、建築用材や魚を入れる箱の材料、あるいは、燃料として使われました。

そのほか、千島火山帯に連なる国後島、択捉島には、金や銀、鉄、銅、鉛などの資源があることが、古くからの調査でわかっていましたが、交通が不便であることなどから、開発はあまり進められませんでした。

それでも、昭和の時代に入ってからは、硫黄、金、銀などが少しずつ生産されていました。

また、漁業や林業の合間に牛や馬の飼育も行われ、北海道や本州に送られていました。

噴煙を上げる国後島硫黄山

ウ　人々の生活

北方領土の主な産業は水産業でしたので、住んでいた人たちの大部分は漁業と、これにつながりのある仕事をしながら生活をしており、毎日の生活に必要な食べ物や用具、あるいは仕事に使う道具類、郵便物、新聞などは、すべて船で運ばれていました。

このため、値段が高かったり、特に、冬になると嵐や流氷で輸送ができなくなってしまったり、北海道や本州にない苦労がありました。

択捉島紗那村の様子（大正時代）

択捉島紗那村の様子

(2012 年(平成 24 年)8 月撮影)

色丹島色丹村チボイの少年たち

家族一緒にマスの塩蔵(注)加工作業する

(1939 年(昭和 14 年)撮影　択捉島留別村)

（注）塩蔵とは、食べ物を長い間保存するために塩につけておくこと。

択捉島での冬季の郵便物の運搬の様子（戦前・撮影年不明）

また、島の道路は道はばが狭(せま)く、坂道が多かったので、馬の背(せ)に荷物(にもつ)をつけて波打ちぎわの固(かた)い砂地(すなち)を道路のかわりに通行することもありました。

品物の輸送に使われた船の大きさは、1,000 トンという大きなものもありましたが、ほとんどは、50 トンくらいの小さな船でした。

択捉島の冬期間の交通と輸送

島のまわりには、暗礁(あんしょう)（注）がたくさんあり、海霧（ガス）や風、波など、天候の変化が激(はげ)しく、港の施設(しせつ)や灯台(とうだい)などの設備(せつび)が少なかったので、事故でちんぼつする船もたくさんありました。

最も困ったことは、急病人やけが人が出たときです。医者や病院は少なく、設備も整っていませんでしたので、重病人などは、船で根室や函館などに送られましたが、何日もかかるので手当てが間に合わないことも多くありました。

（注）暗礁とは、水面の下に隠れていて見えない岩のこと。

色丹島斜古丹市街と斜古丹湾（戦前の様子、撮影時期不明）

色丹島斜古丹市街と斜古丹湾
（2014 年(平成 26 年)9 月撮影）

島には、映画館(えいがかん)などもありませんでしたので、人々の楽しみは、小学校の運動会(がくげいかい)や学芸会、あるいは、地域(ちいき)の人々による演芸会(えんげいかい)などでした。中でも、1 年に 1 回のお祭りは、村中(むらじゅう)をあげて、にぎやかに行われました。

色丹島色丹小学校の運動会（1939 年(昭和 14 年)撮影）

国後島・泊神社の祭礼（1939 年(昭和 14 年)撮影）

スキーを楽しむ択捉島の子供たち（戦前：撮影年不明）

このように、人々の生活は苦しいことや不便なことも多かったのですが、魚や木材など、豊かな資源にめぐまれていたことから、生活は豊かで、島をふるさとに決めた人々は、祖先(そせん)のお墓をつくり、希望をもって暮(く)らしていました。